

名前	テーマ	今回の気づき	意見・感想など
川端渉	テーマを一言で書くのではなく、まずは考えを残していきます。私自身が作品を作るときは、マテリアルに着目しています。しかし完成されたものが多い中で、核となるマテリアルは忘れさられ、気が付かないということは多く。これは、私達の身のまわりには人から取りのぞかれていくものが多いことを指しています。ノイズ、錆、滲み、しわなど。人からは不要と思われるこれらも、テクノロジーではその性質を活用している。人の環境から取り除かれるものに存在感を与えたとき、見慣れた日常はどのように変化していくのかを探究していくというところにテーマをまずはおきたいと思います。	アートプロジェクトは、アートマネージメントが主に思っていたところがありました。しかし、今回の和田永さんと清宮陵一さんの話から、プロジェクトの進み方は、ジャズのセッションに似ていると感じました。見ず知らず人達のゆらぎがある中で、ふっとした時の一体感。その時々で表れるタイミングも異なり、ゆらぎがあるからこそ波長があった時のグルーブ感があると思いました。また、和田さんが土と電磁波、電気の話にアフリカのことを言われていましたが、アフリカの部族の踊りや音楽は大地をもみ、話しかけるなどのコミュニケーションという話を思い出しました。音の振動、踊ることによる振動とともに。そうゆう点では、土着というところも繋がり、腹落ち感があります。	
山崎陽	「時代感」	いろいろテーマを持って挑みましたが、分かりやすい発見を得られたのがこの「時代感」で、和田永さんの音が今の時代とどう関連しているか、今それをやる意味に注目していました。結果なるほど！と納得したのですが、理由となるポイントが二つあります。一つは、あらゆるものがエレクトロ化する昨今、電化製品(日常的なものの)の新旧の激しい入れ代わりは今後もずっと(?)続いていくことであり、話題性に欠かないテーマである点。もう一つは、エレクトロ化=自動化する中、電化製品を使って音楽や身体性という理論無駄なもの(AIならいらなくていい)を行うということは、機械と人間の親和性を表現しているような気がして、今後注目されるテーマだと感じた点です。そこに日本らしい「妖怪」「百鬼夜行」の要素を結びつけ、更に説得力を(僕は感じました)持たせているところも、アイデンティティとして羨ましく思いました。ただあえて言うと、時代はどんなに変わっていくかで、電化製品の形態が変わっていき、新たな表現方法が見つかったとき和田さんはどう対応していくのか、が気になりました。ルールがあり、それを変えずに行くのか、大きな変化をもちたいのか、はたまた辞めるのか。今後の活躍がとて楽しみます！僕のような職業作曲家は「技術」をメインに売り、和田さんのようなアーティスト色の強い方は「アイデンティティ」を売っている、と考えています。もちろん僕にも個性があり、それが重要なことは間違いないですが、今回の講義で和田さんのアイデンティティがどのように作られ、それがどのような音を生み出しているかに触れる事ができ、自分の感性が広がる素晴らしいスタディになりました。	正直なところ、面白すぎて時間が足りませんね……。面白い横道が多すぎです。そこは今後個人的に時間を作って補習するとして、スタディの時間内では聞きたいことが聞ききれず、未解決になっている部分が多いです。僕はグイグイ行こうと思うのいいのですが、他の方々大丈夫かなと、少し気になりました。見渡したとき何度か、「あ、この人今質問したそうだな」と感じる事があったので、余計な心配かとは思いますが……。無理にでも質問させる(もしくはあるかどうか一人ひとりに聞く)時間をとるのも一つの手なのでは、と思いました。裏回りのことを知らない身で、言いたいこと言うようで恐縮です……。！全ては面白すぎるのが問題です。次回以降も、とても楽しみにしています。ありがとうございます。
川端渉	テーマは一つ目のスタディレポートに記載した内容で旅に出るため、このレポートでは記載しません。	一つ目のレポートではプロジェクトの進め方を感じたことを記載しましたが、今回は「音」についてレポートを書いていきたいと思えます。今回の気づきとして、音、音楽の「呼吸」をイメージしました。音そのものが生きており、存在しないのではないかと音の「呼吸」についてイメージしていくと音は「人の感覚」、人が存在しない音そのものも存在しない。人が勝手に作りだした音。音は空気中の縦波として存在しており、それそのものが生きています。音の感覚が得られる波。音楽を聴いて「感動」するとは、感情が振動することだ。そして、音もまた振動であり、そして、振動とは生きている証、つまりは「生命」の証とも考えられる。	
川端渉	1つ目に記載した内容で掘え置いたため、割愛。	電子機器から響く音に着目した。通常の楽器演奏では気付かなかったが、電子機器から響く音はゆらいでおり、特定の音を掴むのが難しい。この難しさをゆらに単音に着目することが出来た。単音には意味的構造が存在していると考えられる。「ピッ(pil)」となる場合、母音のpは触覚的な役割を示している。そして、子音にあたる1つ目のpは形や大きさを表し、2つ目のpは運動を表す。これは「ピッ」だけに限定したのではない。母音がpとは強力のある表面への衝撃または破裂の触覚的感覚を引き起こし、子音により形、大きさ、運動方向へ行く。母音の音がかわっても触覚的なイメージが変わるだけ。子音に着目すると「a(a)」、「i(i)」、「u(u)」、「e(e)」、「o(o)」の法則があり、aは広く平らな、iは細く緊張感、uは突き出る。eは下品、oは物静かが目立たないイメージを作り出す。これに形や大きさ、運動方向がついてくる。和田永くんが表情が重要というコメントを演奏時にしていたが、これは音の意味的構造との関係があるのではないかと直感的にやっていたとしても、音は聴覚を意識してしまいが、触覚的な部分、知覚への変容をする事を意味していると思う。	上記の音の意味的構造は母音と子音で分けて色々なパターンを解析した。表にまとめてあるので、皆さんにお見せすることは可能です。なかなか面白い発見でした。
桐明紀子	音楽が“起こる”場所をつくる	工場と音楽の組み合わせが結びつかず、興味があり参加しました。和田永さんのリズム感が素晴らしい、音楽はどんな場所でも起こる、起こせると気づけました	ライブハウス、フェス、音源、雑誌、Youtube以外の音楽を探していたので大変マッチしました。音楽は起こるのだと実感できました
村瀬朋桂	「音楽の現場にひかれる理由を探る」 テーマがまだ見えません。 実験として、音楽がそこにあることで救われたり、自分自身から新しい感情や考えが生まれたり、行動が変化することがあり、それが何故なのか確かめたい音楽を聴きに行くのですが、そういう空間はどうやってつくれるのかという漠然としたテーマのようなものがありました。音楽があるだけでは成立しないものがあると思いつつも、結局ずっとその先を見ないでもやもやの渦中にいます。もやもやを言語化してくことで、自分のテーマを整理して、どんな仮説が出てくるか考えていきたいです。	印象的だったのは「このプロジェクトに参加してからスランプにならない」という和田永さんの言葉です。あらゆる人が参加するプロジェクトだからこそ、自分自身でコントロールできない予期せぬエラーが起こる。エラーは作家のフィールドを飛び越えたアイデアが産み、お互いを常にフレッシュな状態にしてくれるという、不思議なサイクルでどんどん大きくなっていくニコスのプロジェクトの面白さを改めて実感しました。「内容は関わる人によって変わっていく」という清宮陵一さんの言葉もありましたが、今どんな人がいて、これからどんな人がはいてくるかわからないプロジェクトを、どこまで仮説を立てて動かしていたのか、もっと聞いてみたいと思いました。実はこんなことが起きたから、本日はこう描いていたプロジェクトがこう進むことになった。ここだけは絶対に大切にしているものなど、和田さん視点とプロデューサー視点と比べながら聞いて見たかったです。	講義の内容とは関係ないですが、ふだんそんなに言葉に残す行為をしていないため、いざ書こうとしたときにたくさん浮かぶ言葉をまとめることの難しさを感じました。毎回感想を書くのの良い筋トレになると思いました。講義の中で、スタディの参加者がどう感じたか、その都度共有できると良いと思いました。
山下直弥	新しい音楽の伝え方・売り方・巻き込み方	電化製品を楽器にするという発想も面白いですが、音楽の強度も落とさず、目を瞑って聴いたとしても魅了されるような作品になっていてとても面白かったです。和田永さんの音楽や発想も面白いと思いましたが、ともに一つひとつの活動を言葉にしていけるパートナー(清宮陵一さんなど)がいるからこそ、作品が世の中に浸透しているのではないかと感じました。また、清宮さんだけでなく、コミュニティを作った多くの人を巻き込んでいき、鑑賞者だった人々も参加者となることで新しい発想が生まれ、企画がどんどんと更新されていく。私も野村誠の「千住だけじゃ音楽祭」という現場にいますが、「ニコス」ほど参加者の活動は盛んではないような気がします(この観客がだじゃれ音楽の良さなのですが……笑)。やはり、参加型のプロジェクトである場合、どういう風にコミュニティをデザインしていくか、それが作品の広がりや可能性を高めていくのだなと思いました。	清宮さんと和田さんの関係性が気になりました。一緒に言葉を作っていく関係なのか？一緒に作品を作っていく関係なのか？僕もアーティストと今までのジャンルにはハマらないような作品づくりを行っています。なかなか言語化できない部分もあり、100%伝えることができなかったり、する部分があります。ジャンルレスな音楽作品の場合、どういう風に価値づくりをしていくのか、その過程やプロデューサーの役割をお聞きしたかったです。
蛭川小百合	音楽のプロジェクトをきっかけとした、新たなコミュニティの形成と、その先について考える(仮)	和田永「エレクトロニコス・ファンタスティコス！」について、SNSの動画で見たことがあるという程度、他は予備知識ほぼなしの状態、今回のスタディに参加した。今日は急に演奏を依頼された！と和田さん本人は言っていたけれど、古家電から作った楽器をとても楽しそうに演奏していた。受講生の何人かが試奏させてもらったが、動画で見たときにも思った通り、誰でも音が鳴らせる造りになっている。こんなにも簡単に即興演奏が楽しめるとは。そして和田さんがこんなに朗らかな(テンション高い)青年とは、想像してなかった。出だしから大いに盛り上がり、和田さんも受講生側も良いスイッチが入った気がした。彼の活動紹介より、印象に残ったキーワードは、「電気と土着」とか「電磁気楽器」、「想像の共同体」など。私は自分自身が音楽民族学の考え方に大きく影響を受けたこともあり、土着とか民族という言葉は理解しやすい表現だったし、特に共感した点だった。ニコスは、演奏するとか鑑賞するとか、音楽をそういう括りで切り離さずに、アーティストも参加者も「自分たちの」楽器づくり、祭りをつくるみたいなことをやっているのだから、まさにそこでは「想像の共同体」の「民族音楽」が生まれていると考えられる。切り口など全く異なるが、野村誠さんの日本相撲間芸術作曲家協議会 JACSCHAも、自分たちの儀式をつくるということに参加者とおこなっている点で、同じようなことをやっている。どちらもプロジェクトによって新たなコミュニティが生まれ、アーティストの手を離れたところでも妄想は止まず、動き続けている。ニコスやJACSCHAのような、新しいコミュニティの音楽が生まれるところに、私は携わってみたいのかもしれない。	ノートの提出がぎりぎりになってしまいましたが、全部を一気に書いたわけではなく、2週間かけながら少し余裕をもって思考できたのはよかったです。隔週というのは、ちょうど良いペースな気がします。
川端渉	1回目に書いたので割愛。	音楽は人に何をさせるのか？ レコードやCDなどに音を定着することを前提としていた音楽の不安定化が、音そのもの、そして音を通して人と人の結びつき方に大きな作用を及ぼし始めていること、それが音楽と人を繋げる新しいネットワークの胎動に繋がっている。このように考えると、音あるいは音楽というものは「作品」という客体ではなく、人やものと結びつくことで社会をつくり出し出している行為体として捉えないといけないことになる。作品と人の相互作用のなかに社会が構成されていく視座。「作品」は所有のものとして社会空間に分布されるのではなく、行為体として聴き手を突き動かす聴き手がそれに投影する価値を介して特定の社会位置を獲得する。 人は作品とどのように繋がっているのか？	
高田和音	音楽は人と人とのコミュニケーションを活発にさせるか 音楽はひとの言語にならないか	楽器を作るところから始め、それをみんなと演奏すること、参加型のプロジェクト、それも3~5年かけてできる作品を残すということの面白さ、難しさを感じた。 音と、作品の融合が興味深かった。一般的な美術作品より感覚をたくさん使って鑑賞するという点にとても魅力を感じた。	途中までしかお話を聞けず残念でした。でも、すごく興味深いお話をいただいたので、よかったです。
鈴木美恵	公共で聞こえてくる音楽(聴くではない)	電子音が日常生活で使用されている器(家電)から発音するという斬新さ。日常から非日常へそれが再び日常へと帰化する面白さ。	私は楽器ではない、家電だ！と時に揶揄されているエレクトーンを専門に楽しんできました。自然が好き、伝統的な楽器の価値を評価しつつ、電子的な世界が繰り広げる誰でも楽しめる公共性とどこまでもいけそうな可能性があったからということ再認識しました。実際に家電楽器に触れて、またコラボレーションを通じて、理屈ではない楽しさを体験できました。和田さんの演奏から出てくる音階はアジアのどこかの地域かと思われる、そんな音階が世界観をつくりディレイやグライドのような弦楽器独特の表現も足で可能にしているところまで深化させているところに感銘を受けました。非常にエレクトーンに操作が似ていて、かつ家電生まれというチャミングな知らなかった世界観で視野も広がりました。
宮内俊樹(名小路浩志郎)	時勢を読むセンスと、音楽を「自由」にすること	プロジェクトやコミュニティをいかにして継続・成功するのかのノウハウがいっぱいあるのが、ニコスのもうひとつの面白さだと思う。「クオリアティコントロール問題」や「ネガティブなことが重なる、一気に瓦解したりする」「音楽だからできているのかも」「連れてきた青春感、文化祭な感じ」と表現するいずれも、正解のない運営をトライ&エラーしてきたゆえの説得力があると思う。こういうプロジェクトはありそうでなかなかないと思う。そしてもうひとつ思うのが、そこで奏でられる音空間の独自性である。僕が和田永さんやニコスのLiveに通っていつも印象深く思うのが、非常に感度の高い文化人やクラブやDJといった人々と、一般の市井の人たちがまったく垣根なく楽しんでいる様子である。「親子づれでも楽しめる」といったような区分がまったく無意味になる自由な空間、それこそ「公共における音楽」のあり方の尺度のひとつなのかもしれない。	